

- 20) 松野・重久, 1967, 1968; 日本気象学会1967年秋, 1968年春.  
 21) Murakami, 1965; J. Meteor. Soc. Japan, **45**, 205-231.  
 22) 村上, 1965; 天気.  
 23) Murray, 1960; J.G., R., **65**, 3273-3305.  
 24) Miyakoda, 1963; Tech. Rep. No. 14, Univ. Chicago.  
 25) Miyakoda et al. 1970; J.A.S., **27**, 139-154.  
 26) Nitta, 1967; Month. Wea. Rev. **95**, 319-339.  
 27) Reed et al., 1963; J.A.S., **20**, 265-275.  
 28) 佐藤, 1970; 日本気象学会1970年春.  
 29) Sawada and Matsushima, 1964.  
 30) Sekiguchi, 1963; Atmos. Res. Lab. Ubiv. Oklahoma.  
 31) Teweles, 1963; Mon. Wea. Rev., **91**, 505-519.  
 32) Wexler, 1959; Quart. J. Roy. Met. Soc., **85**, 196-208.  
 33) Wada, 1964; Geophys. Mag., **32**, 77-106.

## 書評

## 籾山政子著「疾病と地域・季節」

B 5 版 228頁 1971年7月文明堂

山 本 義 一

籾山さんの近著「疾病と地域・季節」は、表題の示す通りの分野について、著者の長年にわたる統計的な研究の成果を縦糸とし、この方面の内外の文献を渉猟して得られた著者の知識を横糸として織りなされたユニークな著作である。著者も自認しているように、疾病と季節の関係を説いた第Ⅲ部がことによくできている。豊富な統計資料によって“人間社会の進展と共に疾病死亡の冬季集中化が形成される”という事実を立証し、さらに一層生活程度の向上したアメリカ合衆国および北欧諸国では死亡の冬季集中の段階はすぐにすぎて、むしろ季節変動が緩慢化していることの説明の部分などは、説得力に富み、大家の論説のおもむきがある。著者が序文で粗雑な内容だと謙遜している疾病と地域について説いた第Ⅱ部も決して悪いできばえではない。そこに数多く示されている統計地図は、私のような門外漢にはいちいち新鮮で興味がある。それらの図の背後にかくされている筈の因果関係の説明について、著者がひかえめな態度をとっているのも、学者として良心的なあり方であると思う。このような多くの分野にまたがり、複雑な機構が予想される問題については、まず統計的に意味のある事実を抽出してその特徴を記述すること自体が大変価値のあることである。このことはその機構の解明という困難な、しかし興味のある問題に対する若い研究者の食欲をそそらな

い筈はないと思う。

ここで評者の希望をのべるならば、本書に述べてあるマラリヤ以外に、もっと多くの疾病のグローバルな分布について資料をあつめてのせてほしかつた。そうしたグローバルな分布図には地域の特性、文化の程度、気候などの総合的影響が見られるだろうという点で興味があるからである。

個人的なことに言及して恐縮であるが、私は地理学が好きで、若い頃地理学を専攻しようかと真剣に考えたこともあった。いろいろの統計的結果が表示されている地図や、同様の趣旨のグラフを眺めていると、自分なりに感想や空想がわいてきて、時のたつのを忘れる。これはいまに至つても私の楽しみの一つである。籾山さんの著書を読むことによって素材が私にとって新鮮であったという点と、私の嗜好を満足させてもらったという意味で二重の楽しみを味わった。

この本は医学、地理学、生態学、気候学の専門家は勿論、広く一般の知識人にも読んでもらい度い本である。

(山本義一)

(付記) 本書の書評は本誌前月号に吉野正敏教授のものが掲載されているので、併せて読まれるよう希望する。  
(天気編集委員会)